

## 第5回「風と雲の広場」——「手づくり村・ミニのどう」を中心に 「つくる」×「はたらく」×「まなぶ」——遊びと学びの融合

7月24日(土)、第5回「風と雲の広場」を開催しました。今回は「手づくり村・ミニのどう～つくる×はたらく×まなぶ」と題して、「手づくり」と「はたらく」という体験を味わえる活動に取り組みました。これは第2回「野童いなか塾」も兼ねており、地域の魅力の再発見や、地域内外の人々の交流もめざましいものでした。幸い天気も良く、地元や京都・奈良・大阪など各地から100名余りの家族連れが参加し、夏の午後の一日をのんびりと過ごしました。

### 「子どもの共同体」へ

「手づくり村・ミニのどう」は、「ミニ・ミュンヘン」など各地で広がる「子どもの共同体」の活動をヒントにしています。ユニークなのは子どもたちだけで小さな「共同体」をつかって、働きながら自分たちで運営するという、遊びと学びを融合した点です。「風と雲の広場」では、地域通貨「チャオ！」を媒介に、参加者同士が持ってきたものを交換するという試みを続けてきました。今回はこれに加えて、「はたらく」「手づくり」の体験をした人に、その対価として「チャオ！」を支払い、つくった物も「チャオ！」で買うことができる、というシステムにしました。

「ミニのどう」独自の工夫としては、野殿・童仙房ならではの特徴を生かして、「地元の材料」と「手づくり」をテーマに決定。最初に全員に同じ額の「チャオ！」を手にして、好きなところで好きなように働く、という形を取りました。これにあわせて会場も中央の「広場」を囲む形で、校庭にテントを設置。自由に行き来し、時間の決めごともなくゆったりと行なわれました。



「チャオ！」の広場

### 「衣・食・遊」——地元産が大活躍

「手づくり」と「はたらく」体験は、「衣・食・遊」をテーマに三つのエリア（および交換のための「チャオ！」の広場）を設置。なるべく身近で誰もがができるものと考え、「衣」（おしゃれ）のコーナーでは、地元の茶ガラを使った草木染体験や、木の実や枝などを使ったアクセサリーづくりを行ないました。また国立民族学博物館の貸出体験教材「みんぱく」を使ってのインドのサリーを試着するコーナーも。「食」（たべる）コーナーでは、地元の猟師さんがとった鹿肉・猪肉を使ったカレーを、マキ割りから始めてみんなで手づくり。鹿肉の上品な味わいが大好評でした。また地元産の抹茶を使った宇治金時のかき氷や、近くの畑で抱えきれないほど摘んできたブルーベリーの実でつくったジャムなど、地元の食材を味わうことができました。「遊」（あそぶ）のコーナーでは（「住」とからめて）、ダンボールで大きなお城をつかって、思い思いに木の実などを貼りつけたり、落書きをしたりして楽しみました。

今年も「彩京前線」が「京炎そでふれ」の踊りを披露し、全員踊りの輪に加わってのフィナーレとなりました。今回は、草木染の経験者が周りの人に教えたり、年長の子がはじめて会った小さい子の仕事を手伝ったりという様子が見られました。またダンボールのお城やかき氷などのコーナーでは、子どもたちが次々オリジナルの遊びを生み出していたのも印象的でした。

今回は初めての試みでしたが、今後は安全の配慮を十分にしたらうえて、おとなの介入をできるだけ少なくして子どもたち自身の手で運営が進められたらと思います。私たちにとっても、ゆったりと交流しながらプログラム化されない学び合う場をつくるという、新しい世界をかいまもることのできた貴重な経験でした。参加、協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

(吉田正純)



今後のお知らせ、詳細などは <http://souraku.net/manabi/>

京都大学問い合わせ先：教育実践コラボレーション・センター  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院教育学研究科  
TEL：075-753-3075, URL：http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/collabo/

野殿・童仙房問い合わせ先：野殿童仙房生涯学習推進委員会  
〒619-1401 京都府相楽郡南山城村大字童仙房小字三郷田 199 番地 2  
会長 中村富士雄／副会長 内藤芳男

2011年3月10日発行  
発行：京都大学大学院教育学研究科  
教育実践コラボレーション・センター  
「教育空間創造ユニット」  
編集：前平泰志  
編集協力・イラスト：鏡純香  
制作：(株)松籟社

# 風と雲の便り

野殿・童仙房から……

野殿・童仙房へ…… vol.15

洞窟のなかに 壁面に映る影だけを見ている囚人がある  
囚人たちは この影こそが真実だと思いこんで生きているとしたら  
この束縛から解き放たれて 影ではなく光の世界、真実の世界へと  
到達するためには 何をなすべきなのだろうか

プラトンの『国家』の洞窟の寓話は このような問題意識に基づいている

真実の世界を見るためには 目という器官を取り換えるのではなくて  
見る方向さえ変えることができれば可能だと考えた  
それが有名な教育論 〈向け変えの技術〉だ

洞窟から出て行って 永遠に帰ってこない人  
洞窟に帰っていった方がいいが  
「君たちが見ているのは、影であって本物ではない」と演説をぶって  
洞窟に残る囚人たちに殺されてしまった人  
いずれも プラトン自身は批判的だ

プラトンが投げかけた無明の世界の闇は広くて 深い



「野童（のどう）いなか塾」は、2010年5月から始まり、ほぼ月一回（第3または第4土曜日の午後）、旧野殿童仙房小学校を拠点に、様々な活動を行なっています。2006年に小学校が閉校になった後、地域の方々と京都大学大学院教育学研究科が協同で、楽しみながら学ぶ場所をつくろうとしてきました。そのなかで生まれた「いなか塾」は、自然豊かな野殿・童仙房の地で、いろいろな体験にチャレンジする「塾」です。そこには、地域を訪れた人と地元の人たちが交流できる場所をつくりたいという願いが込められています。

町や学校ではできない、「いなか」ならではの魅力にあふれた活動をめざしています。親子やグループでの参加、野菜や「ものづくり」のワザの持ち寄りも大歓迎です。ひと味違う「学びの場」を皆さんも体験してみませんか。

吉田正純 Masazumi YOSHIDA 教育実践コラボレーション・センター 助教 坂上元太 Genta SAKAUE 教育学研究科修士2 回生  
山口記世 Kiyu YAMAGUCHI 教育学研究科修士1 回生

### 「場」をつくり、人とつながる——活動の三つの目標——「第0回」報告



「野童いなか塾」

私たちは2010年早々、地元の方と今後の地域と大学の協同の活動について、話し合いました。その過程で、住民が自分たちの地域の魅力を発見するような取り組みを創っていくにはどうすればよいかについて様々な意見が出されました。そこで話題となったのは、地域を訪れた方が散策したくなるような「地域マップ」作りや露天風呂作り、里山歩き、望遠鏡を活用した「天文台」作り、またソバの種を蒔くことから始めるソバ打ち体験などです。

こうした話し合いを重ねたうえで、「野童いなか塾」は出発しました。「野童」は旧野殿童仙房小学校の名称にあやかって、「いなか」は、いなかの価値の再認識の試みを託して。「塾」は学校とは違う自由な学びの場として位置づけたいという願いが込められています。私たちは

はこの「いなか塾」の活動の目標を、次の三点に定めました。

- ①「体験をつうじた学びの場」——子どもたちの「生きる力」を引き出すような、「いなか」ならではの直接体験ができる場を創ること。そしてその体験を通じてえられた驚きや発見を、自分の関心や理解と結び付け、自分自身のものとしていくこと。
- ②「地域発見・地域づくりの場」——訪れた人はもちろん、地域住民も地域の魅力に気づき、それを活かしていくような活動にすること。また魅力を伝え育てることで、「地域づくり」の場にもしていくこと。
- ③「出会いと交流の場」——子どもとおとな（年長者からお年寄りまで）、地域住民と訪問者たち、外国からきた人たちなど、様々な出会いが生まれ、互いの交流のなかで、新たな発見や成長ができるような場を広げること。

そして、実行です。まず、プレ企画として第0回「野童いなか塾」（5月16日）と称して「童仙房地域散策」を大学と地元のスタッフを中心に行ないました。その時はちょうどお茶摘みの時期で、童仙房でも唯一「手摘み」をしている畑で、作業を体験。地域を散策すると、車で通るだけでは見逃しがちな山菜や水利の工夫、開拓の痕跡が残る岩石などに気づきます。最近童仙房に引っ越してきた、アニマルセラピーに取り組んでおられるご夫婦の家では、かわいい二頭の馬への餌やりなども体験。同小学校からは少し距離のある、南北朝時代の伝説のある「稚児の滝」にも足を運び、予想以上の滝の水の落差の迫力に圧倒されました。今回体験してわかったことは、自分たちで動いて発見する楽しさと大切さです。私たちの「いなか塾」はそのことをあらためて感じることができるものをつくっていきたいと思っています。（吉田正純）



馬への餌やり

### 自然と遊ぶ、自然に学ぶ——「自然観察会」——「第1回」報告

6月26日に第1回「野童いなか塾 自然観察会」を開催しました。この自然観察会は、NPO 自然観察指導員京都連絡会のご協力の下、「自然と遊ぶ」というテーマで行ないました。もちろん、虫や草花の様々な特性を知っていると「自然との遊び」は、より楽しくなりますが、それらの知識は、「自然との遊び」のなかでこそ、徐々に得られていくものなのです。

自然観察会ではまず、旧野殿童仙房小学校を起点にし、小学校の西側を南北へと走っている三郷田林道を4グループに分かれて、時間差で観察しました。同じ道では知識が重複し、楽しみが膨らまないのではないかとと思われるかもしれませんが、そうではありません。グループを先導してくださった観察指導員の方々は、各々専門知識が異なるので、同じ道でもそれぞれ違う遊びを発見することができました。おとなにとっては、知識と子どもの頃に遊んだ思い出が重なり合う学びとなり、そして子どもは、その独特の感性によって、おとなとは異なる見方を提示し、さらに指導員の方の「遊び」がそれに加わって、この観察会では、幾段階にも重なりあう「教え—学び」をすることができました。



「店開き」の様子

しかし、これで終わるとそれぞれ発見したことが拡散してしまいます。そこで観察員の方々の「店開き」という方法を通して振り返りを行ないました。もちろん、ここでも「遊び」は忘れられてはいません。みんなで集めた虫や草花を床に広げて、遊び方を教えてもらったり、クイズを通して新しい知識を提供してもらったりすることで、虫や草花がより親しみやすいものとなりました。

虫や草花と直接触れあうことによって、「遊び」や「学び」がとけあっていく体験をすることができました。このように、その時々地域の自然の不思議を楽しめることができたのは、「観察会」の指導員の方々のおかげです。あらためて、お礼申し上げます。

（坂上元太）

### 遊びが学びに変わるとき、もっと遊びが面白くなる——「昔の遊び体験」——「第3回」報告

8月21日に行なわれた第3回の「いなか塾」のテーマは、「昔の遊び体験」でした。おはじき、メンコ、お手玉、糸でんわなどの懐かしい遊びに、おとなも子どもも笑顔の絶えない一日となりました。

印象的だったのは、子どもに対して教えたり手伝ったりという形ではなく、子ども以上に真剣になって遊ぶおとなたちの姿でした。コマまわし、けん玉、ヨーヨーなどは見事なものでした。子どもたちもおとなに負けぬ腕前を見せてくれ、その自由で工夫に富んだ発想に驚かされることもありました。

同じ遊びでも、世代や地域によって遊び方が異なるというのも興味深く感じました。例えばゴム跳びでは、跳び方や歌が全く異なるものがありました。様々な遊び方があるなかで互いに自分の知っている遊び方を出し合いながら、どうしたらもっと面白く遊べるか、もっと上手く出来るか、おとなも子どもも共に考え試していく。そこには、テレビゲームのように与えられたお題をこなしていくのとは違った、工夫し、発見し、創りあげる楽しさがありました。

昔の遊びには、その時集まった人たちでアイデアを出し合い、作り替えられていく一面もあるのではないのでしょうか。今回の「いなか塾」は、おとなから子どもまで、それぞれの知が混ざり合い、新たな知が生まれる場でもあったと思います。このように世代を超えて一緒になって遊び、学びあうということは、昔は当たり前だったのかもしれませんが、現代の生活にはそのような機会は決して多くはないと感じます。遊びを通して人とふれあい、学びあう喜びをあらためて実感できる、貴重なひとときになったと思います。

（山口記世）

